

昇級試験審査概要

第一部 六段以上（三月号の段位）

五名の審査員による合同審査

準推薦は四〇〇点満点中三九九点で推薦に合格

推薦格は三九〇点満点中三八八点（平均点七八点以上）で

準推薦に合格

正教授以下の段位では合格点に達した者は一階級、審査員

全員が合格点を与えた者は二階級昇格

* 六段格以下の者も受験可（受験料は第一部料金）

各部門分担審査

優秀作品は最高三階級昇格

第二部 六段格以下（三月号の段級）

第三部 初段格以下（ 〃 ）

五名の審査員による分担審査

優秀作品は最高三階級昇格

* 第二部は初段格以下の受験可（受験料は第二部料金）

毎月競書を出品している方は是非受験して下さい。

手本・添削希望者は書道会事務局へお申込下さい。

その他の事項は裏表紙の昇試規定を参照の事。

半紙課題（予告）（四月二十二日締切）

平岡華雪先生書 名園花草香し。（杜甫）

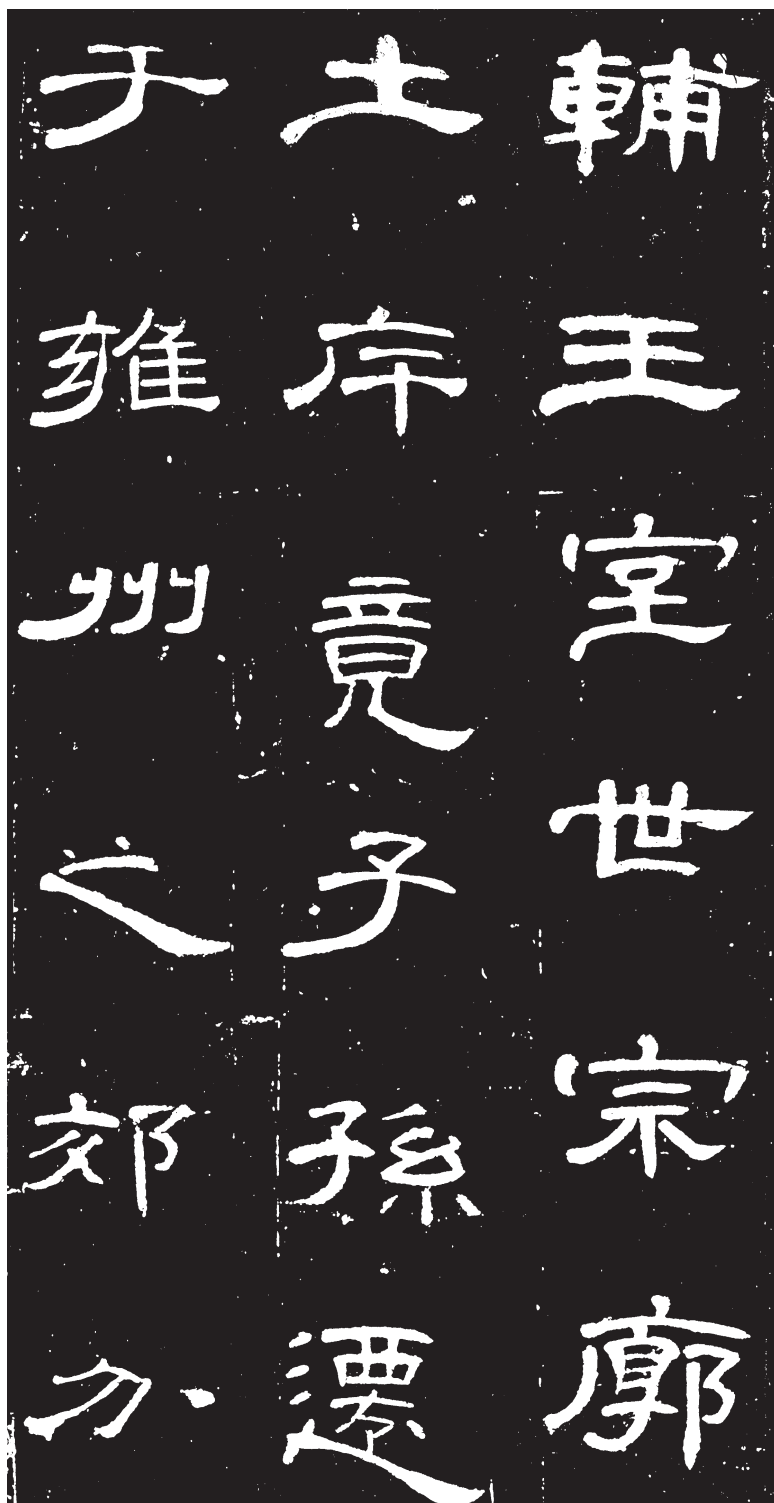
名園花草香

訳：百花はもゆるように咲きみだれている。

平岡華雪先生書 山吹に水や、もつれ流れけり（紫雲郎）

山吹に水や、もつれ流れけり

曹
全
碑



(曹參夾) 輔王室。世宗廓土斥竟。子孫遷于雍州之郊。分

曹參王室を夾輔せり。世宗土を廓め竟を斥くや、子孫雍州の郊に遷り、分れて

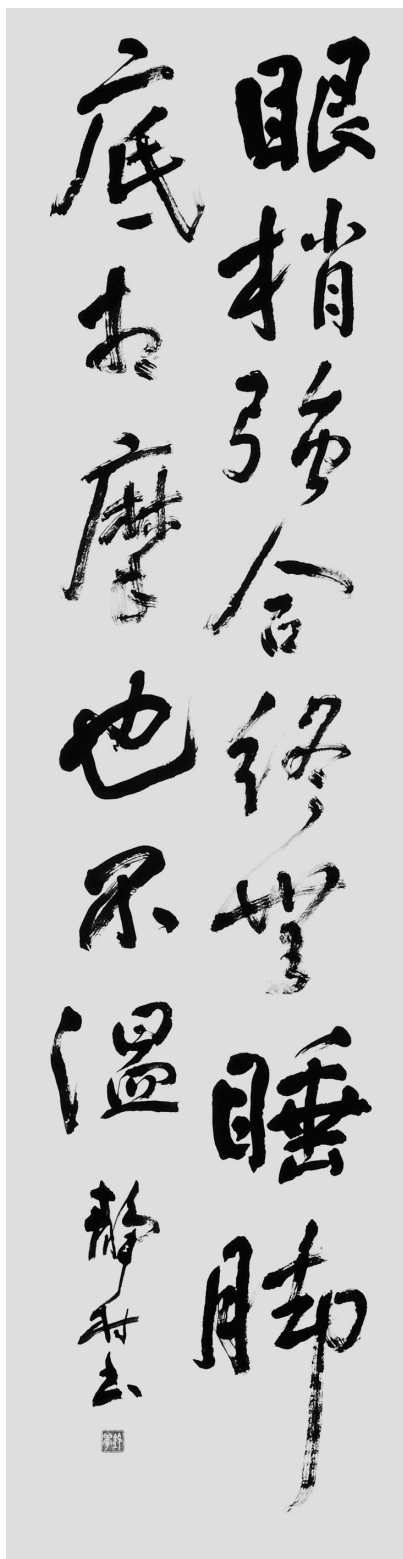
※昇試随意参考(条幅・半紙)としてご活用下さい。抜粋可。

◆注 意 ・裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

鈴木静村書

眼梢強合終無睡 脚底相摩也不温 (楊誠齋)
眼梢強て合するも終に睡る無く、脚底相摩するも也た温かならず



B

高橋香樹主幹書

「終」無の連綿はご覧の通り無理。掛けて見るに自分ながら苦しい。この場合「終」字で墨継ぎ。右行末の「脚」の終画を長めは、私の好み、ただ伸びやかな中にも「味」に留意。左行「底相摩」渴筆部分。「相」草体を使い締め気味。「也」墨継ぎして一気に落款まで。要注意は「睡」旁の筆順、間違いないように。



この作では配字に迷った。一行目を七字にするか八字にするか。最初は七字にして「脚」を二行目の頭に持ってゆき、足を長くしてみたが仲々納得いくものが出来なかつた。そこで、再度試みたのがこの作です。墨継ぎは「睡・摩」。書き進めていく内に、行書が少なくなり、このように草書が多
訳：まぶたは強いて合すがとうとう眠られず、足の裏をこすりあわせてもあたたかくはならぬ。
い作となりました。

予告

(四月二十二日締切)

對酒燭分花底夜

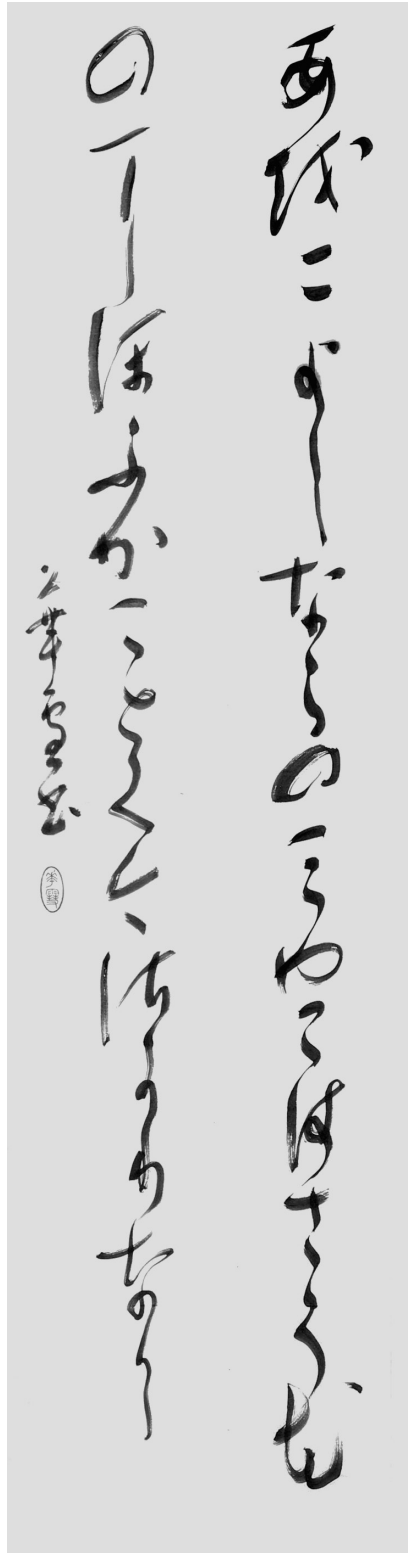
出簾香散竹間風 (華幼武)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

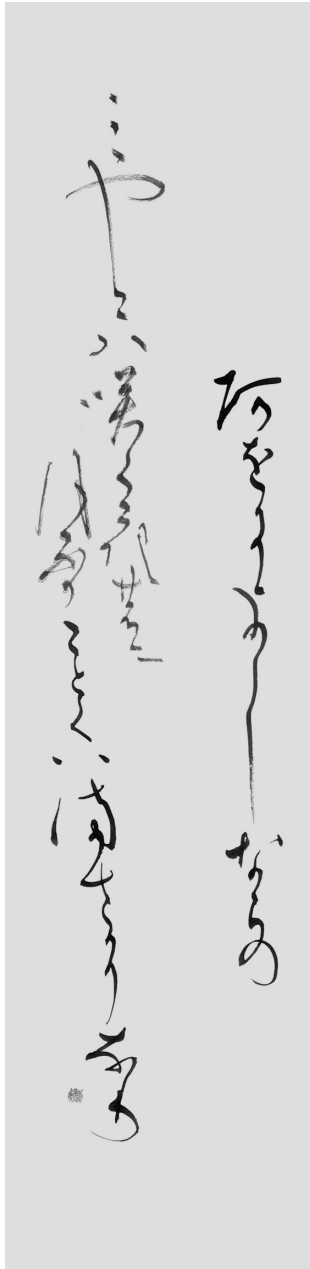
あをによしならの都は咲く花のほふがごとく今盛りなり(万葉集 小野老)
あ越二よしならの三やこほさく花の耳ほふかごとく今佐可利なり



B

武井春凌先生書

あをによしならの三やこほさく花農二保ふ可ことくいま満さ可り奈利



三行書に書きました。

「阿を尔よし」墨を多めに入れ、二行目の「三やこ八」から渴筆を意識しつつ、「ことく」で墨を入れ、潤渴を表現しました。二行目と三行目は寄せて、一行目と二行目に空間を作り、余白を考慮しました。

学び方

- 「あをによし」 奈良にかかる枕詞
- 「あをに」は、建築物の装飾に使う青土(あをに)のこと。奈良が名産地だった。青土と丹(水銀朱)が、美しい国の意にも。

予告 (四月二十二日締切)

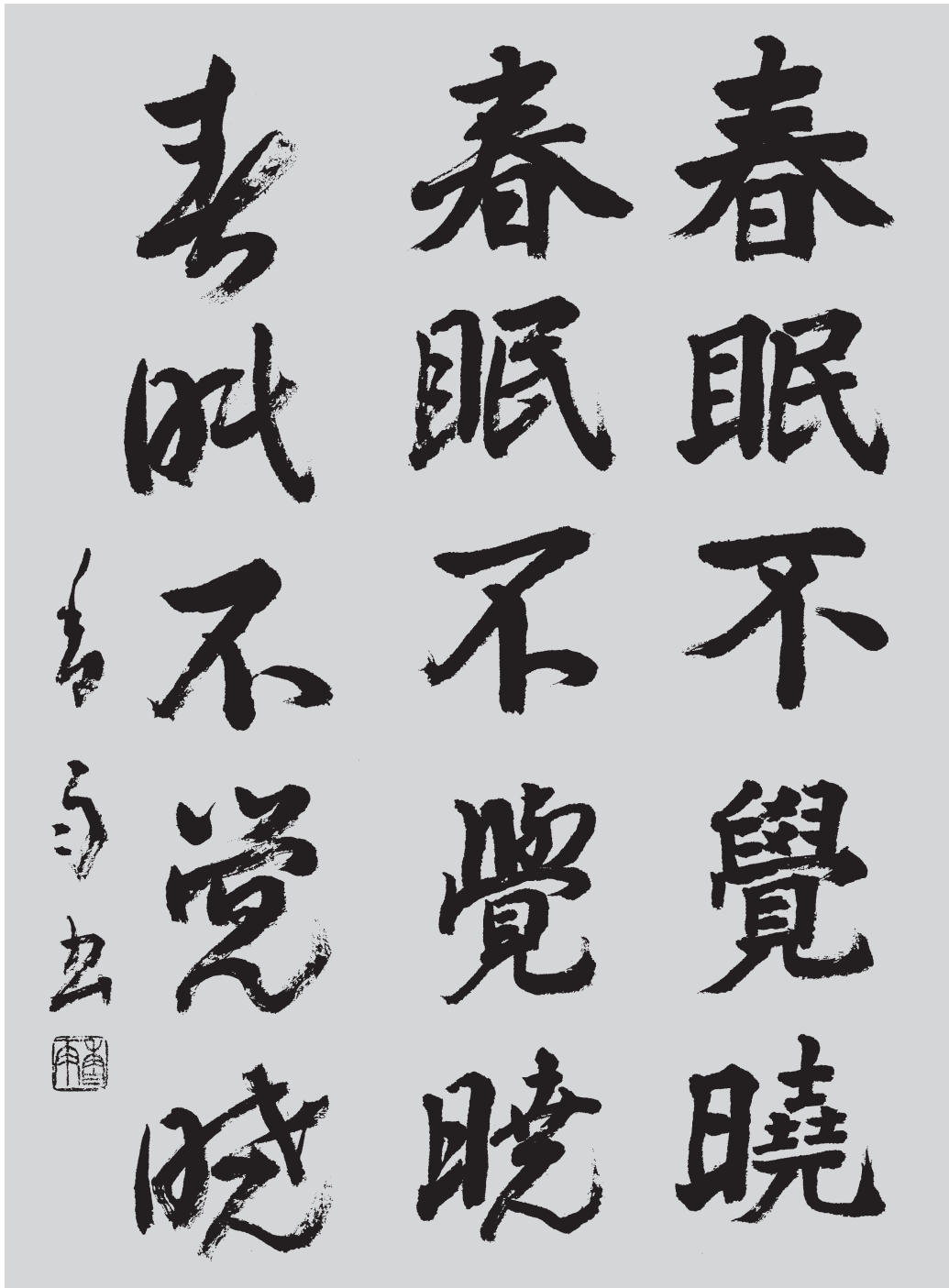
ふもとまでおのへの桜ちりこずはたなびく雲と見てやすぎまし (新古今和歌集)

万葉集 三二八 雑歌
作者 小野老
生年不詳〜七三七年
小野老は、大伴旅人の配下で大宰大式(大宰府の次官)を務めており、大伴旅人の帰京と前後して大宰府から平城京に戻ったらしい。ひとしお帰京の喜びを詠う。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

酒井香雨先生書

春眠不覺曉(子孟浩然)
しゅんみんあつさ おぼ
春眠曉を覚えす。

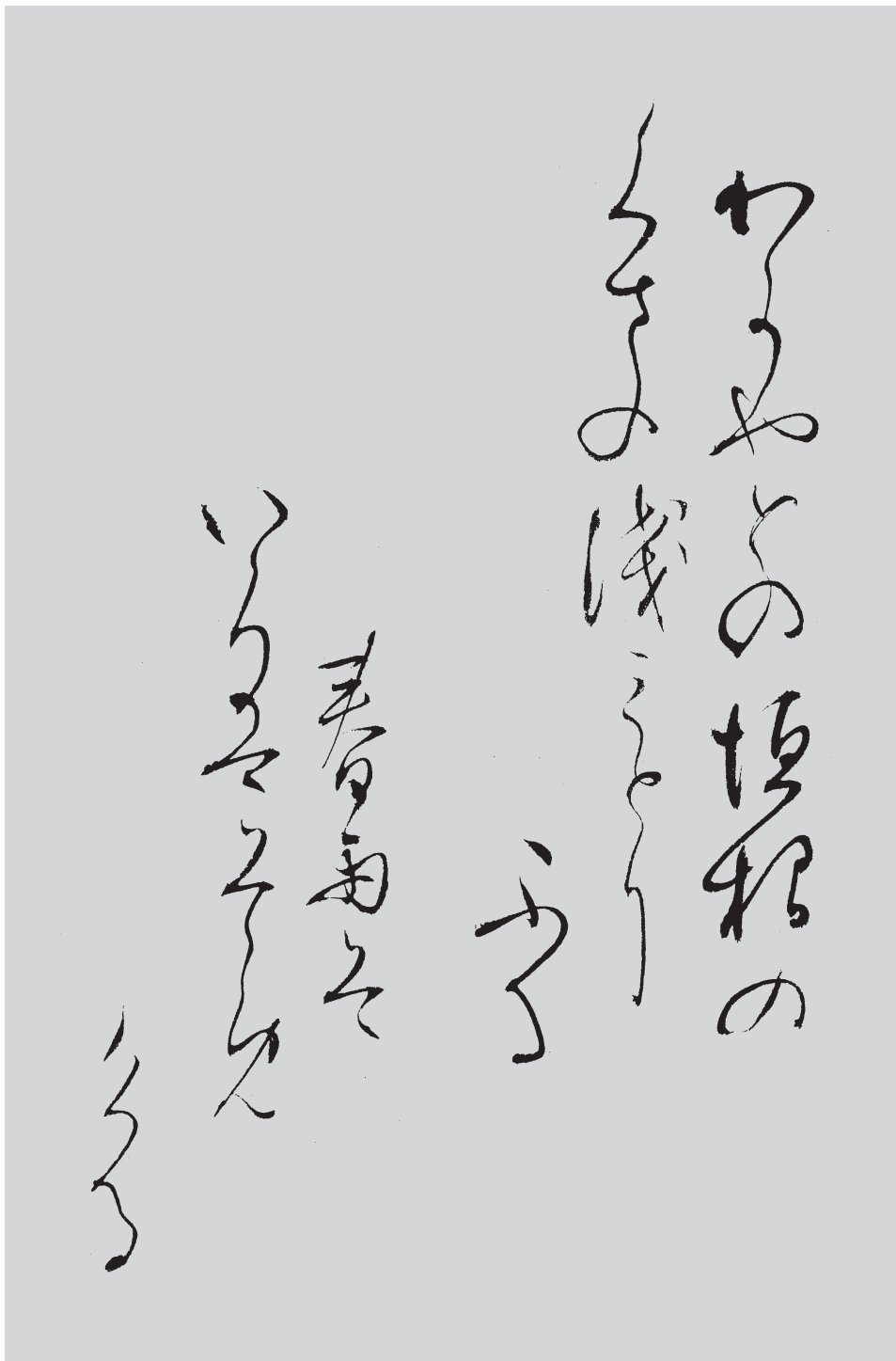


訳：春は氣候が暖かくよく眠れる。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高塚竹堂先生書

わがやどの垣根の草の浅みどりふる春雨ぞ色はそめける(能宣)



左余白に落款「〇〇書」と調和を工夫し書き入れる。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



平岡華雪先生書

江山花柳に満つ(劉因)

訳：春が山にも川にも訪れ花や柳が満ちわたる。

へ「満・柳」について
左の書き方でもよい。

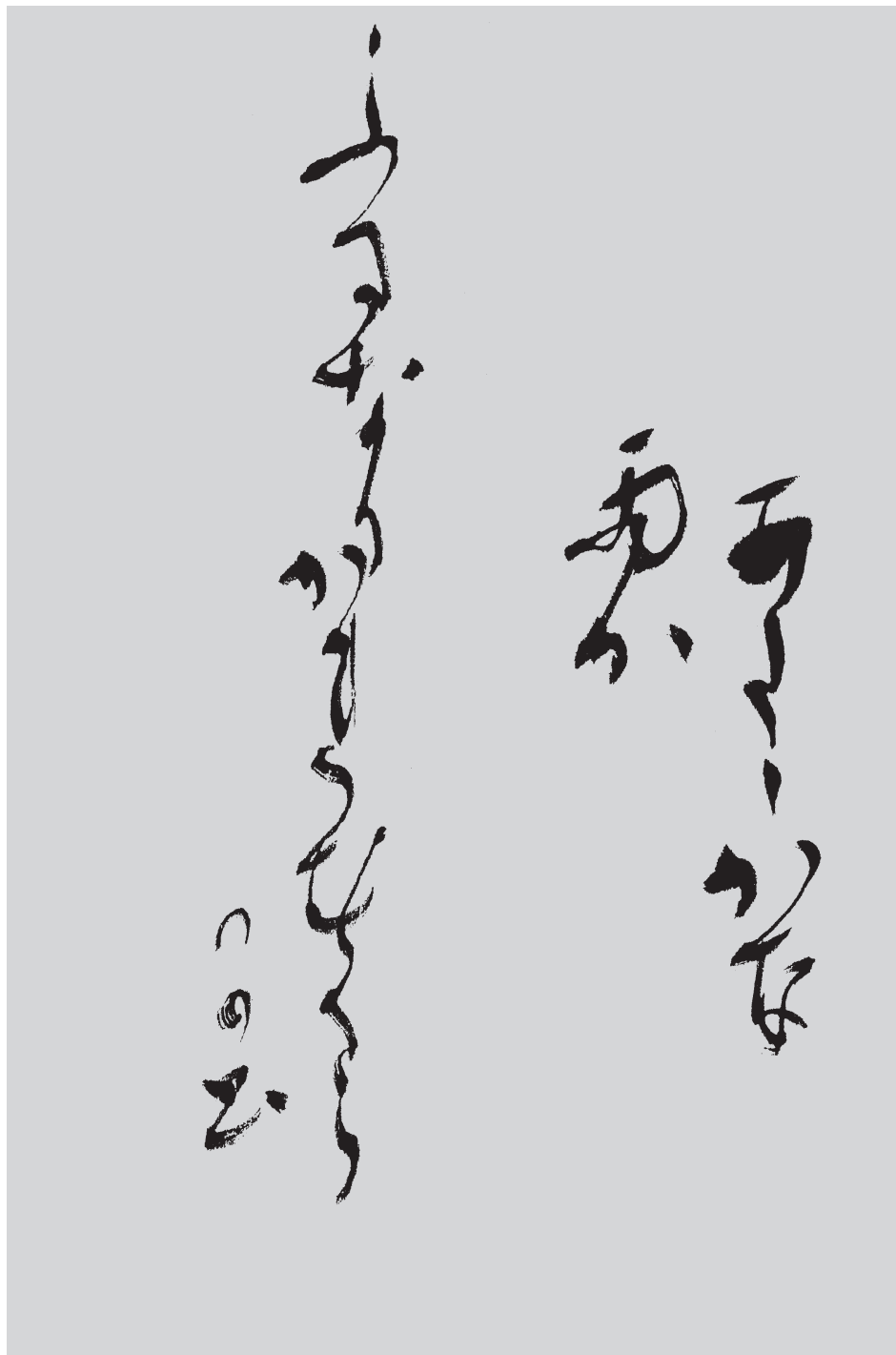
満柳

古典に多く見られる。「柳」の最終画スッキリと決めたい。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

あたゝかな雨が降るなり枯^{かれむくろ}律
あ^た多^たゝかな雨がふるなりか連^れむく^ら



〈弾みの用筆―特に初歩段階者〉
かな用筆の基本用筆の「弾み」が多く使われています。「あ・雨」の第一筆、「多ゝか」では、スポツという感じの線が連続しています。これらは「弾み」のリズムです。左群にも「ふ」の第一筆をはじめ、弾み用筆が駆使されています。筆毛の弾力を軽快に、リズムに乗せて連筆するように練習で深めて下さい。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

路川千曄先生書

一聲啼鳥破春寂 數點落花生暮寒（翁朗）
一聲の啼鳥春寂を破り、數點の落花暮寒生ず。

一聲啼鳥破春寂
數點落花生暮寒

千曄

訳：ただ一声鳴いた鳥は春の寂しさを破り、一三点散りそめた落花は端なくも夕暮の寒さを起こした。

絹村光豊先生書

蒼雲のそぐへを見れば立ち渡る春はまどかにいや遙かなり（長塚節）
蒼雲のそぐへを見れば立ち渡る春はまどかにいや遙か奈り

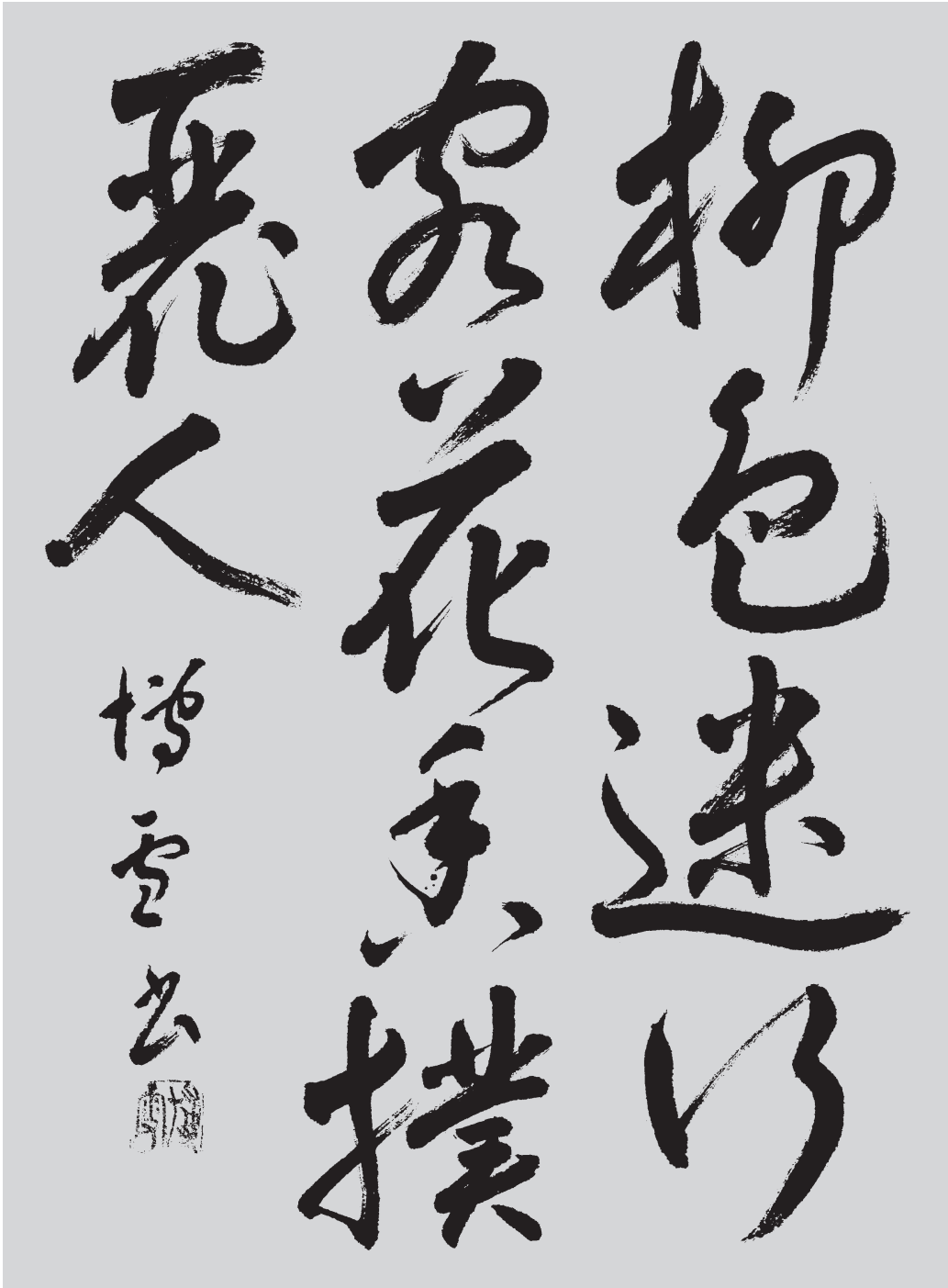
蒼雲のそぐへを見れば立ち渡る春はまどかにいや遙かなり

光豊

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

本
田
博
雪
先
生
書

柳色迷行客 花香撲麗人（蘇正）
柳色行客迷い、花香麗人を撲つ。

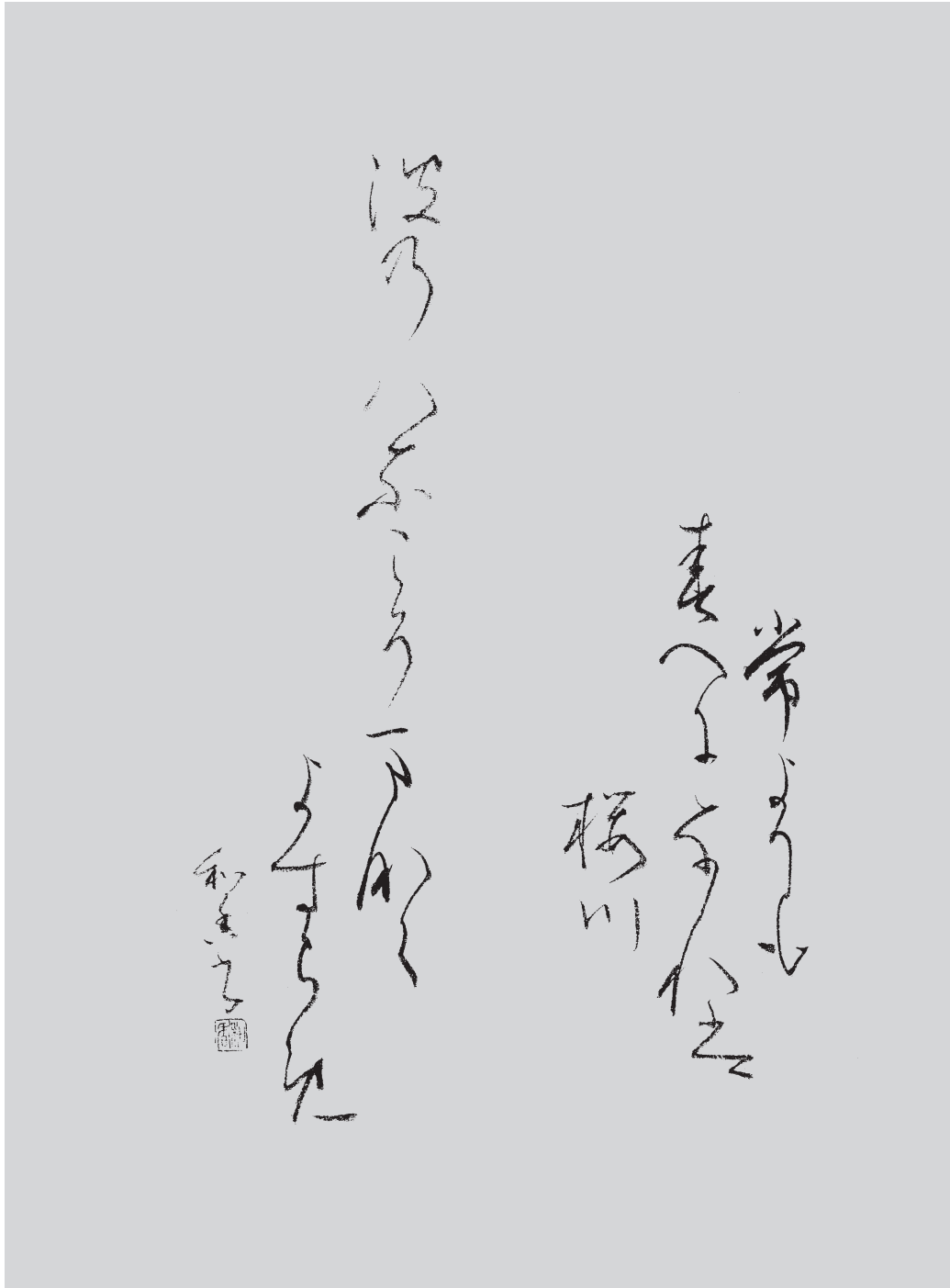


訳：楊柳の色は暗く茂って路行く旅人を迷わせ易く、花は香気を放って美人の衣裳などにそそぐ。

◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

内田和香先生書

常よりも春へはるになればはな桜川波さくらがはなみのはなこそまなくよすらめ（後撰和歌集 紀貫之）
常よりも春へはる尔奈れ盤はな桜川波さくらがはなみ乃八奈のこそまなくよすらめ（曾万那くよすらめ）



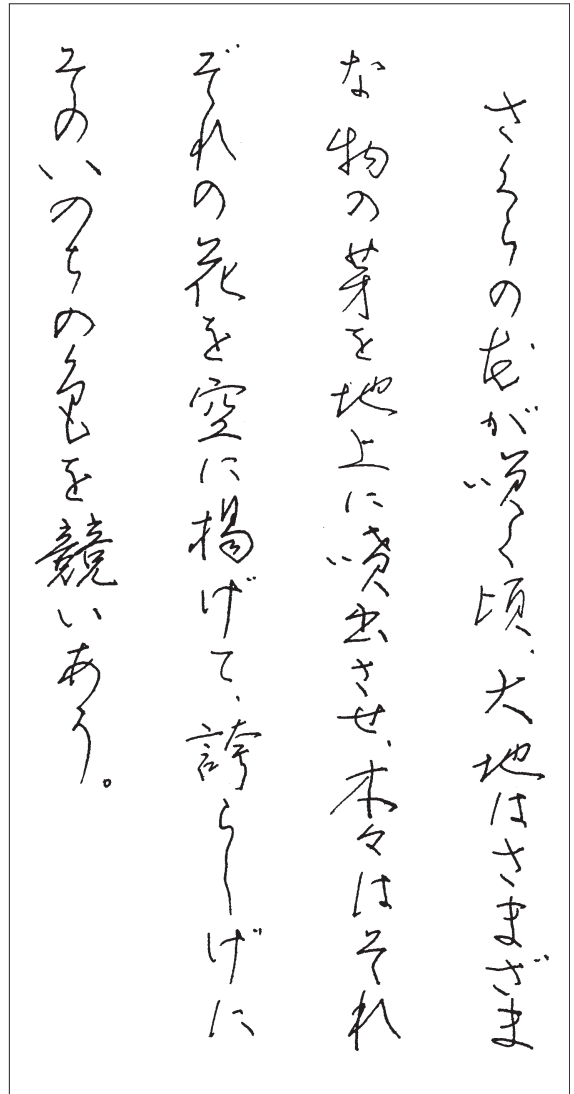
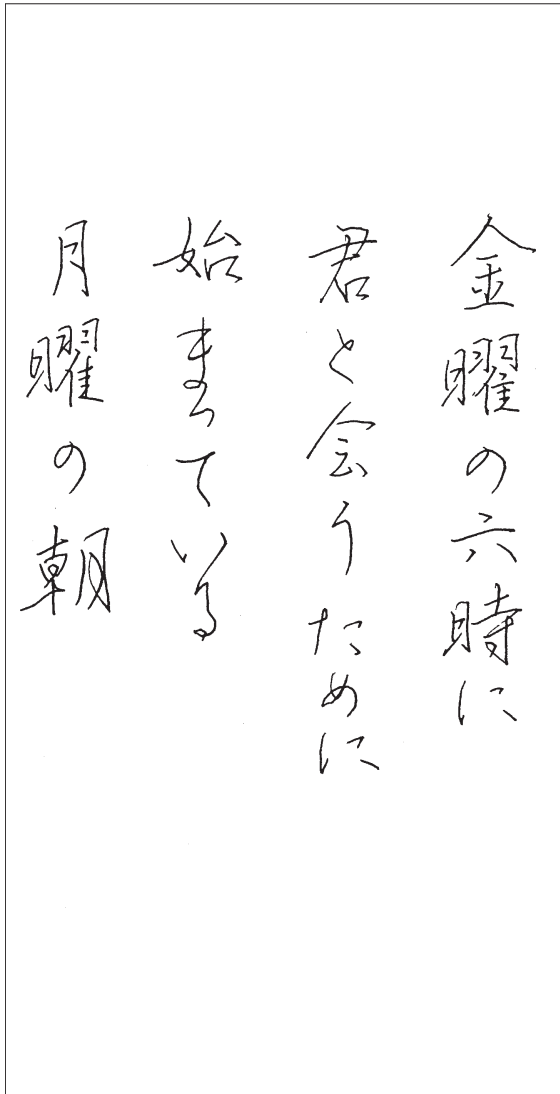
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

松浦江波先生書

石原春香先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)



課題1 (初段階以上)

さくらの花が咲く頃、大地はさまざま
な物の芽を地上に噴出させ、木々は
それぞれの花を空に掲げて、誇ら
しげにそのいのちの色を競いあう。

「歌の彩事記」馬場あき子

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四二〇円

課題2 (初段階以下)

金曜の六時に君と会うために
始まっている月曜の朝

「会うまでの時間」依 万智